感謝された後に向社会的行動が起こるまでの心理過程^{1,2}

蔵永 瞳 滋賀大学 樋口 匡貴 福田 哲也 上智大学

The psychological process of exhibiting prosocial behaviors after receiving gratitude

Hitomi Kuranaga (Shiga University), Masataka Higuchi, and Tetsuya Fukuda (Sophia University)

The purpose of this study was to explain the psychological process of exhibiting prosocial behaviors after a person receives gratitude. The results of a preliminary survey indicated that psychological responses are organized into six categories for people who receive gratitude and five categories for those who do not receive it. Participants who participated in this study's two main surveys completed questionnaires measuring their psychological responses and prosocial behaviors after receiving or not receiving gratitude. Participants in Survey 1 recalled their experiences of receiving or not receiving gratitude from their friends after exhibiting prosocial behaviors, whereas Survey 2 participants recalled their experiences of receiving or not receiving gratitude from strangers. Regression analysis showed that among participants who received gratitude from others, the "affirmative responses to one's own behavior" promoted a wide variety of prosocial behaviors. Furthermore, a "desire to receive gratitude" promoted prosocial behaviors toward another person after not receiving gratitude.

Key words: helping, moral reinforcer function, prosocial behavior, receiving gratitude, receiving no gratitude.

The Japanese Journal of Psychology

2018, Vol. 89, No. 1, pp. 40–49

J-STAGE Advanced published date: February 20, 2018, doi.org/10.4992/jjpsy.89.16070

我々は、他者から親切にしてもらったとき等、社会生活の中でしばしば感謝という感情を経験する。これまでの研究において、感謝は、自身に利益をもたらした他者の行動に対する肯定的感情反応と定義され、他者に利益をもたらすためにとられる行動である向社会的行動と関連深い感情の一種として位置づけられてきた (McCullough, Kilpatrick, Emmons, & Larson, 2001)。実際、感謝と向社会的行動との関連を検討した先行研究では、感謝した人がその後、自身に親切をしてくれた他者 (Bartlett & DeSteno, 2006; DeSteno, Bartlett, Baumann, Williams, & Dickens, 2010; Goei & Boster, 2005; Tsang,

2007) や、そういった相手に限らない他者一般 (Bartlett & DeSteno, 2006; DeSteno et al., 2010; Tsang, 2007) に対して向社会的行動をとりやすくなることが実証されている。

感謝という感情を経験することによって向社会的行動が起こりやすくなることを明らかにした上記の取り組みは、感謝することが向社会的行動を促す機能を明らかにしてきたと言える。しかしながら、感謝に関してはこれ以外にも、感謝されることによって向社会的行動が促される機能も指摘されている (McCullough et al., 2001)。本研究では、従来多くの研究で検討されてきた感謝することの機能ではなく、感謝されることの機能に着目することで、従来とは異なる観点から、感謝と向社会的行動との関連について実証的知見を提供することを目指す。

感謝されることと向社会的行動

感謝されることが向社会的行動を促す機能の存在を示唆する実証的研究としては、Moss & Page (1972), Clark (1975), Goldman, Seever, & Seever (1982), Crano & Sivacek (1982), Grant & Gino (2010) がある。以下、

Correspondence concerning this article should be sent to: Hitomi Kuranaga, Faculty of Education, Shiga University, Hiratsu, Otsu 520-0862, Japan. (E-mail: hitomikuranaga@gmail.com)

¹ 本研究は科学研究費補助金 (若手 (B) 課題番号 25780372) から助成を受けて実施した。

² いずれの調査に関しても、手続きに関して、広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得た。調査にあたっては、調査参加の任意性や、不参加による不利益がないこと、回答は無記名であり、個人が特定されることはないことを説明した。

それぞれの研究について概観した上で、先行研究の課題を述べる。

Moss & Page (1972) は、他者から頼まれて道を教えた際に、道案内をした相手から (a) 感謝の言葉を述べられる肯定的反応条件、(b) 単に分かりましたとだけ言われる中性的反応条件、(c) 道案内の説明が理解できないと不満を言われる否定的反応条件と、(d) 道に迷っている他者と遭遇しない統制条件を設定した。この実験において従属変数となった向社会的行動は、上記の道案内のやりとりの後、全く別の人が、実験参加者の目の前で鞆を落としてしまい、それに気付かないという状況に遭遇したときの対応であった。具体的には、落とした鞆を拾って届ける、鞆を落としたことを口頭で教えるといった行動が起こるかどうかが測定された。

実験の結果、肯定的反応条件（感謝された後）では、否定的反応条件（感謝されなかった後）と比べて向社会的行動が起こりやすいことが示された。この結果は、感謝された後は、感謝されなかった後に比べて向社会的行動が起こりやすくなることを示唆している。また、本実験ではこれ以外にも、否定的反応条件（感謝されなかった後）は、他のいずれの条件よりも向社会的行動が起こりにくいことも示された。この結果は、自身の行った向社会的行動が感謝されず、否定的に反応された場合には、向社会的行動が起こりにくくなることを示唆している。

Clark (1975) は、上記の Moss & Page (1972) と類似した内容の実験を行った。この実験では統制条件は設けられていなかったが、肯定的反応条件（感謝された後）の方が否定的反応条件（感謝されなかった後）よりも向社会的行動が起こりやすかったことは同じであった。

Goldman et al. (1982) や Crano & Sivacek (1982) は、フット・イン・ザ・ドア・テクニックについて検討した研究であるが、その実験条件の中には、実験参加者が感謝される内容の操作が含まれている。まず、Goldman et al. (1982) では、実験参加者が道案内をした際の相手の反応として、相手から (a) 単純に感謝の言葉を述べられる Foot 条件、(b) 本当にありがとう等と繰り返し強く感謝の言葉を述べられる肯定的 Foot 条件、(c) 道案内の説明が理解できないと言われる否定的 Foot 条件の 3 条件を設定した。これらの実験条件のうち、(a) Foot 条件は、向社会的行動を行った相手から相対的に弱く感謝される条件、(b) 肯定的 Foot 条件は、相手から相対的に強く感謝される条件、(c) 否定的 Foot 条件は、相手から感謝されず、むしろ否定的な反応を受ける条件とみなすことができる。同実験では、これら 3 条件に加えて、道案内をすることのない統制条件も設定された。なお、この実験の従属変数として測定された向社会的行動は、道案内をし

た相手とは全く別の人からインタビューへの協力を依頼された際の対応であった。具体的には、慈善寄付を募る番組制作のための長時間にわたるインタビュー協力を依頼され、それに協力するか否かが測定された。

実験の結果、向社会的行動は、統制条件よりも Foot 条件（弱く感謝された後）で起こりやすく、Foot 条件よりも肯定的 Foot 条件（強く感謝された後）で起こりやすいことが示された。これらの結果は、感謝される強度が増すにつれて、その後の向社会的行動が起こりやすくなることを示唆している。また、否定的 Foot 条件（感謝されなかった後）は、統制条件よりも向社会的行動が起こりにくいことが示された。この結果は、自身の行った向社会的行動が感謝されず、むしろ否定的に反応された場合には、向社会的行動が起こりにくくなることを示唆している。

Crano & Sivacek (1982) は、感謝された向社会的行動が、結果的に相手の役に立たないものであった場合でも、感謝された後には向社会的行動が起こりやすくなるのかを検討した。実験では、実験参加者が短時間のインタビューに協力し、その際のインタビュー어의発言が操作された。具体的には、(a) インタビューの後に感謝の言葉を受ける有用・肯定的反応条件、(b) インタビュー中に、実験参加者が調査対象に該当しないことが発覚するが、インタビューへの協力に対して感謝の言葉を受ける無用・肯定的反応条件、(c) インタビュー中に、実験参加者が調査対象者ではないことが発覚し、あなたのデータは使用できないと事実を伝えられる無用条件の 3 条件が設定された。また、上記の 3 条件のほかに、(d) これらの条件よりも非常に長い時間のインタビューを受け、特に肯定的・否定的反応を受けない高負荷条件と、(e) インタビューを受けることのない統制条件も設定された。この実験で従属変数として測定された向社会的行動は、先に受けたインタビューとは全く関係のない別の人から調査協力を依頼された際の対応であった。具体的には、長時間にわたる調査を依頼され、その依頼に応えるか否かが測定された。

実験の結果、有用・肯定的反応条件（役に立ち感謝された後）と、無用・肯定的反応条件（役に立たなかったが感謝された後）はいずれも、他の条件と比べて向社会的行動が起こりやすいことが示された。また、有用・肯定的反応条件（役に立ち感謝された後）と無用・肯定的反応条件（役に立たなかったが感謝された後）とでは、向社会的行動の起こりやすさに有意な差はなかった。これらの結果は、自身の行った向社会的行動が結果的に役に立とうと立つまいと、相手から感謝されたかどうかで向社会的行動の起こりやすさが変動することを示唆している。

ここまで概観してきた先行研究は、他者から感謝された後に向社会的行動が起こりやすくなることを実証

的に示してきた。以下に記す Grant & Gino (2010) の研究は、そこから更に、感謝された後になぜ向社会的行動が起りやすくなるのかを明らかにするため、感謝された際に生じる認知・感情（以下、心理変数とする）も含めた検討を行った。同研究では 4 つの実験を実施しているが、そのうち実験 1, 2, 4 では、向社会的行動として、就職活動の際に使用するカバーレターの添削が取り上げられた。実験条件としては、実験 1, 2, 4 いずれでも、実験参加者がカバーレターを添削した後に (a) 添削に対して感謝の言葉を受ける感謝表出条件と、(b) 特に感謝の言葉を受けない中性的反応条件の 2 条件が設定された。従属変数としては、実験 1 では、一度目に添削したカバーレターの作成主と同じ人物からの添削依頼、実験 2 では、別の依頼主からの添削依頼に答えるかが測定された。実験 1, 2 は、向社会的行動のやりとりがメールを媒介とした非対面のものであったが、実験 4 ではそのやりとりが対面で行われた。実験 4 の従属変数は、実験 1 と同様であった。

実験 3 は、上記の実験 1, 2, 4 とは違い、大学の資金集めを行う職場を対象に行われた実験であった。この実験では、大学の重役から日頃の仕事に対して感謝の言葉を述べられるかどうかを操作することで、その職場の従業員の仕事量、すなわち、資金集めのために電話をかける量が変わるかが検討された。職場での仕事量という指標は、向社会的行動の指標として妥当性が高いとは言えないが、この職場での業務は大学運営のための資金集めであるため、他者のためになる側面があるという点で、向社会的行動としての特徴を帯びた指標と言える。

分析の結果、4 つの実験いずれにおいても、感謝されなかった後よりも感謝された後の方が、向社会的行動が起りやすいことが示された。また、一連の実験においては、感謝された際に生じ、その後の向社会的行動に影響を及ぼす心理変数として、夢中な、イライラした等のポジティブ・ネガティブ感情、自身は有能であるという感覚である自己効力感、自身が社会的に価値ある存在として認められているという感覚である社会的価値といった変数が取り上げられたが、いずれの実験でも、上記の影響を媒介したのは社会的価値のみであった。

Grant & Gino (2010) による以上の実験の結果は、感謝された後に向社会的行動が起りやすくなるという先行研究の結果を追証したことに加えて、この現象に社会的価値という心理変数が関わっていることを明らかにした。

先行研究の課題

ここまで述べてきたように、従来の研究では、感謝が、感謝した本人だけでなく、感謝された人の向社会

的行動にも関わっていることを明らかにしてきた。しかし、これらの先行研究には、感謝されることによってなぜ向社会的行動が起りやすくなるのかを明らかにするにあたって、検討が不十分な点が存在する。以下では、先行研究の課題について詳細を述べる。

第一の課題は、感謝された際に生じ、その後の向社会的行動に影響を及ぼす認知や感情について幅広い検討が行われていない点である。先行研究の中でこの点について検討を行ったのは Grant & Gino (2010) のみであるが、同研究においては、社会的価値という、向社会的行動を行った人自身が自分についてどのような認識をもったかが、その後の向社会的行動に影響を及ぼすことが示されている。しかしながら、他者に対して向社会的行動を行い、それが感謝されるという現象は対人相互作用であることを考慮すると、他者から感謝された際に生じる心理変数には、自身に関する内容だけではなく、他者に関する内容もあると予想され、それらの内容は多様であると考えられる。感謝された後になぜ向社会的行動が起りやすくなるかを明らかにする上では、まず、感謝されたときにどのような認知や感情が生じるのか、その内容を幅広く把握した上で、そのうちいずれが向社会的行動に影響を及ぼすのか検討する必要がある。

第二の課題は、向社会的行動を行う相手の拡がりが十分に考慮されていない点である。先行研究においては、一度目と二度目の向社会的行動の相手が同じ場合もあれば (Grant & Gino, 2010 の実験 1, 3, 4)、そうでない場合もある (Clark, 1975; Crano & Sivacek, 1982; Goldman et al., 1982; Grant & Gino, 2010 の実験 2; Moss & Page, 1972)。同じ相手に向社会的行動を繰り返しやすくなることと、他者一般に向社会的行動を行いやすくなることとは、対人関係における向社会的行動の拡がりという面で性質が異なる。前者は、向社会的行動が特定の二者関係の中で繰り返されることを意味するのに対して、後者は、向社会的行動を行う関係が他者一般に拡がることを意味している。そして、このような性質の違い故に、向社会的行動に影響を及ぼす心理変数は異なることが予想される。感謝された後に向社会的行動が起りやすくなるという現象の特徴を捉える上では、同じ相手に対する向社会的行動の繰り返しと、他者一般への向社会的行動の拡散を区別して捉え、それぞれに関わる心理変数を明らかにする必要がある。

第三の課題は、向社会的行動の内容の拡がりが十分に考慮されていない点である。先行研究においては、一度目と二度目の向社会的行動の内容が同じ場合もあれば (Crano & Sivacek, 1982; Grant & Gino, 2010)、そうでない場合もある (Clark, 1975; Goldman et al., 1982; Moss & Page, 1972)。同じ内容の向社会的行動を繰り返しやすくなることと、向社会的行動一般を行いやす

くなるということとは、向社会的行動の内容の拡がりという点で性質が異なるため、影響を及ぼす心理変数も異なる可能性がある。しかし、感謝された後に向社会的行動が起こりやすくなるという現象に関わる心理変数を検討した Grant & Gino (2010) では、同じ内容の向社会的行動の繰り返ししか扱っていないため、向社会的行動一般が起こりやすくなる現象にどのような心理変数が関わっているのかに関しては実証的知見がない。感謝された後に向社会的行動が起こりやすくなるという現象の特徴を捉える上では、同じ内容の向社会的行動が繰り返される現象だけでなく、向社会的行動一般が起こりやすくなる現象についても検討を行う必要がある。

第四の課題は、感謝されなかった後に向社会的行動を抑制する心理変数について、十分な検討がなされていない点である。先行研究においては、感謝された後の方が、感謝されなかった後よりも向社会的行動が起こりやすいことが示されているが (Clark, 1975; Crano & Sivacek, 1982; Goldman et al., 1982; Grant & Gino, 2010; Moss & Page, 1972)、この差は、感謝された実験条件において、向社会的行動の促進要因となる心理変数が生じた結果と考えられるが、感謝されなかった実験条件において、向社会的行動の抑制要因となるような心理変数が生じた結果とも考えられる。しかし、これまでの研究においては、向社会的行動を抑制する心理変数としてネガティブ感情しか取り上げておらず (Grant & Gino, 2010)、同研究において、ネガティブ感情は向社会的行動に対して有意な影響を及ぼしていなかった。この結果から、感謝されなかった後に向社会的行動が抑制されるという現象にどのような心理変数が関わっているのかについては、これまでの研究では全く明らかになっていないと考えられる。感謝されることと向社会的行動との関連を明確にする上では、感謝された後に向社会的行動を促進する心理変数だけでなく、感謝されなかった後に向社会的行動を抑制する心理変数も検討する必要がある。

本研究の目的

以上の議論より、本研究では、感謝されたときに生じる認知や感情を幅広く収集し、その内容を整理した上で (予備調査)、そのうちいずれが向社会的行動に影響を及ぼすのかを検討することを目的とする (本調査 1, 2)。なお、従属変数とする向社会的行動については、前後における相手と内容の拡がりを考慮し、(a) 同じ相手に対する同じ内容、(b) 同じ相手に対する向社会的行動一般、(c) 他者一般に対する同じ内容、(d) 他者一般に対する向社会的行動一般の 4 指標に分けて測定する。

また、感謝された後だけでなく、感謝されなかった後についても同様の検討を行うことによって、感謝さ

れないことで向社会的行動が抑制される心理過程についても検討を行う。

本研究では、以上の取り組みにより、感謝されたあるいは感謝されなかった後に、周囲の人への向社会的行動の在り方が変化する心理過程を明らかにすることを目指す。

予備調査

目的

感謝された／されなかったときに生じる認知や感情を幅広く収集し、その種類を整理する。

方法

対象者と手続き 大学生 89 名を対象に質問紙調査を行った。調査時期は、2012 年 7 月であった。調査では、回答者が誰かに親切をしてその人から感謝された／されなかったと感じた過去の経験を一つ思い起こしてもらい、そのときのことについて尋ねた。

質問項目 感謝された／されなかったとき、その場で感じたことや考えたことを箇条書きするよう求めた。この調査では、1 名の回答者に対して、感謝された／されなかったときの双方について尋ねた。

結果と考察

調査の結果、感謝されたときについて 74 名分 (男性 28 名、女性 40 名、性別不明 6 名、平均年齢 18.85 歳)、感謝されなかったときについて 84 名分 (男性 30 名、女性 46 名、性別不明 8 名、平均年齢 18.86 歳) の回答が得られた。認知や感情についての記述は、複数の内容が含まれているものを分離し、内容が曖昧なものや解釈不能なものを除外した結果、感謝されたときで 102 件、感謝されなかったときで 72 件、計 174 件の記述が分析対象として得られた。

分類にあたっては、まず、心理学を専門とする大学教員 1 名および大学院生 2 名の計 3 名で最初のカテゴリ作業を行った。その後、分類結果を知らない別の心理学専攻の大学院生 1 名に各カテゴリの内容を説明し、174 件それぞれの記述がいずれのカテゴリにあたるかを再分類してもらった。その結果、当初 3 名で行った分類結果との一致率は 94.25%、kappa 係数は 0.97 となった。これらの値から、分類の結果は、一定の信頼性が確保されたものと考えられる。当初の分類結果と再分類結果とで不一致であったものについては、当初分類した者と再分類した者で話し合い、最終的な分類結果を決定した。その結果、感謝されたときの心理変数として 20 カテゴリ、感謝されなかったときの心理変数として 14 カテゴリが得られた。以下に各カテゴリの詳細を記す。

感謝されたときの心理変数は 20 カテゴリに整理さ

れたが、そのうち回答者の複数名が報告していたのは、(a) 嬉しさ (37 名, 例: 嬉しかった), (b) 行為の正当性 (22 名, 例: して良かった), (c) 貢献感 (12 名, 例: 役に立てた), (d) 受け流し願望 (4 名, 例: 別に気にしなくて良いのと思った), (e) 好感 (3 名, 例: 感じの良い人だと思った), (f) 感謝されたことへの感謝 (2 名, 例: 自分も相手に感謝した) の 6 カテゴリーであった。

感謝されなかったときに関して、複数の回答者が報告していたのは、(a) 嫌悪感 (23 名, 例: イライラした), (b) 軽蔑 (10 名, 例: 人としておかしい), (c) 悲しみ (6 名, 例: 悲しい), (d) 後悔 (6 名, 例: やらなければよかった), (e) 感謝要望 (6 名, 例: お礼を言ってほしい) の 5 カテゴリーであった。

以上のように、感謝された／されなかったときの心理変数には、自身が行った向社会的行動に関する内容のほか、向社会的行動を受けた相手に関する内容も含まれていた。また、全体的に、感謝されたときの心理変数には、自身が行った向社会的行動や相手について肯定的に捉えたものが多く、感謝されなかったときの心理変数には、否定的な内容が多い傾向がみられた。

本 調 査 1

目 的

予備調査で整理した認知や感情が向社会的行動に及ぼす影響を検討する。予備調査で報告のあったすべての心理変数を取り上げるとモデルが複雑になるため、本調査では、その中でも複数名が報告したカテゴリを相対的に重要度の高い変数として取り上げることとした。

また、本調査 1 では、感謝された／されなかった向社会的行動の受け手は友人に指定した。予備調査では感謝された／されなかったときの認知や感情を幅広く収集するため、受け手との関係は指定しなかった。しかし、本調査 1 では、従属変数としてとりあげる指標の中に、同じ相手に対する向社会的行動の繰り返しが含まれている。そのため、調査対象者である大学生にとって身近で、関係が継続する相手であり、その後も向社会的行動を行う機会があるだろうと考えられる友人からの感謝を検討対象とすることとした。

方 法

対象者と手続き 大学生 228 名を対象に、集合調査法および宿題調査法による質問紙調査を行った。調査時期は、2013 年 1 月および 7 月であった。調査では、回答者が友人に親切をして感謝された／されなかった過去の経験の一つ思い起こしてもらい、そのときのことについて質問項目に回答してもらった。質問紙は、感謝されたときについて尋ねるものと、感謝されな

かったときについて尋ねるものそれぞれ 1 種類ずつを用意し、いずれかの質問紙に回答してもらうよう、無作為に配布した。

質問項目 まず、感謝された／されなかったときの認知や感情の測定を行った。質問項目は、予備調査で得た自由記述の内容を参考に作成した。以下に、各心理変数の名称と質問項目を記す。なお、測定項目に出てくる「A さん」は、回答者に対して感謝した／しなかった友人のことを指す。調査では、感謝された／されなかったときに回答者が考えたことや感じたことに各項目がどの程度当てはまるか、当てはまらない (1 点) —非常に当てはまる (5 点) の 5 段階で回答を求めた。

感謝されたときの心理変数としては、(a) 嬉しさ (項目: 良い気分になった; 嬉しかった; 気持ちが良かった), (b) 行為の正当性 (項目: 親切をしてよかったと思った; 親切をしたことは正しかったのだと思った; 自分は良いことをしたと思った), (c) 貢献感 (項目: 人の役に立てたと思った; 自分のした親切が役に立ったと思った; A さんの助けになれたと思った), (d) 受け流し願望 (項目: 自分がした親切は特別なことではないので、気に留められなくて良いと思った; 自分がした親切は当然のことなので、そんなに気にしないしてほしいと思った; 自分がしたことは当たり前のことなので、あまり意識しないしてほしいと思った), (e) 好感 (項目: A さんは良い人だと思った; A さんは素敵な人だと思った; A さんは常識のある人だと思った), (f) 感謝されたことへの感謝 (項目: A さんに対してありがとうという気持ちを感じた; ありがたいと感じた; A さんに対して感謝を感じた) の 6 変数を測定した。

感謝されなかったときの心理変数としては、(a) 嫌悪感 (項目: 腹が立った; 不快に感じた; イライラした), (b) 軽蔑 (項目: A さんは人としておかしいと思った; A さんは常識を知らない人だと思った; A さんの人格を疑った), (c) 悲しみ (項目: つらかった; さみしい気持ちを感じた; 悲しかった), (d) 後悔 (項目: 親切をするんじゃなかったと後悔した; おせっかいをしてしまったと後悔した; 親切をしなければよかったと後悔した), (e) 感謝要望 (項目: もう少しちゃんとお礼を言ってほしいと思った; 親切をしたことに対してお礼を言ってほしいと思った; もっとありがとうと言ってほしいと思った) の 5 変数を測定した。

従属変数とする向社会的行動に関しては、(a) 同じ相手に対する同じ内容 (項目: 今回と同じようなことを、また今度も A さんにしてあげよう), (b) 同じ相手に対する向社会的行動一般 (項目: 今後は、今回のような親切だけでなく、いろいろな親切を A さんにしてあげよう), (c) 他者一般に対する同じ内容 (項目: 今度、他の人にも同じような親切をしてあげよう), (d)

Table 1
本調査 1（友人からの感謝）における各変数の平均値、標準偏差、 α 係数

心理変数	感謝されたとき				感謝されなかったとき		
	<i>M</i>	<i>SD</i>	α		<i>M</i>	<i>SD</i>	α
嬉しさ ^a	3.67	(1.26)	.90	嫌悪感	2.68	(1.39)	.92
行為の正当性 ^a	3.76	(1.12)	.84	軽蔑	2.27	(1.31)	.92
貢献感 ^a	3.64	(1.19)	.88	悲しみ	2.57	(1.20)	.84
受け流し願望	2.98	(1.23)	.86	後悔	2.16	(1.14)	.80
好感	3.05	(1.10)	.76	感謝要望	2.65	(1.36)	.91
感謝されたことへの感謝	2.43	(1.26)	.90				
結果への肯定的反応 ^b	3.69	(1.13)	.95				
向社会的行動							
	<i>M</i>	<i>SD</i>			<i>M</i>	<i>SD</i>	
同じ相手／同じ内容	3.41	(1.40)			1.79	(1.00)	
同じ相手／向社会的行動一般	3.21	(1.44)			1.69	(0.98)	
他者一般／同じ内容	3.57	(1.33)			2.78	(1.25)	
他者一般／向社会的行動一般	3.71	(1.28)			2.80	(1.28)	

^a 相関が高かったため、結果への肯定的反応として一つにまとめた変数。^b 嬉しさ、行為の正当性、貢献感を一つにまとめた変数。

他者一般に対する向社会的行動一般（項目：今回のような親切に限らず、いろいろな人に、いろいろな親切をしていこう）の 4 指標に関して、各 1 項目で測定した。回答段階は、当てはまらない（1 点）—非常に当てはまる（5 点）の 5 段階であった。

最後に、人口統計学的変数として、回答者の年齢と性別を尋ねた。

結果と考察

回答に不備のあったデータを除いた結果、感謝されたときについて 109 名（男性 45 名、女性 64 名、平均年齢 20.17 歳）、感謝されなかったときについて 101 名（男性 40 名、女性 61 名、平均年齢 19.69 歳）のデータが分析対象として残った。

各変数の構成 心理変数と向社会的行動 4 指標の記述統計を Table 1 に示す。測定した心理変数について信頼性係数を算出した結果、 $\alpha s > .75$ となり、十分な内の一貫性が示された。また、先行研究と同様に、感謝された後の方が感謝されなかった後よりも向社会的行動が起こりやすいかを確認するため、向社会的行動の 4 指標それぞれに従属変数として、感謝された後と感謝されなかった後とで得点を比較する t 検定を行ったところ、いずれの指標に関しても、感謝された後の方が、感謝されなかった後よりも有意に得点が高かった（同じ相手に対する同じ内容で $t(208) = 9.57, p < .001, d = 1.32$; 同じ相手に対する向社会的行動一般で $t(208) = 8.87, p < .001, d = 1.22$; 他者一般に対する同じ内容で $t(208) = 5.12, p < .001, d = 0.61$; 他者一般に対する向社会的行動一般で $t(208) = 4.42, p < .001, d = 0.70$ ）。

各種の心理変数が向社会的行動に及ぼす影響 各種の心理変数が向社会的行動に及ぼす影響を検討するにあたって、まず、説明変数となる心理変数間に多重共線性の危険がないかを検討した。具体的には、感謝されたときの 6 変数（嬉しさ、行為の正当性、貢献感、受け流し願望、好感、感謝されたことへの感謝）間、感謝されなかったときの 5 変数（嫌悪感、軽蔑、悲しみ、後悔、感謝要望）間で、VIF を算出した。一般に、VIF が 5.0 を超える場合には多重共線性に注意を要する（Montgomery, Peck, & Vining, 2012）。分析の結果、感謝されたときに関して、 $VIF = 6.54$ となる場合があり、多重共線性が疑われた。6 変数間の相関係数を算出したところ、嬉しさと行為の正当性 ($r = .87, p < .01$)、行為の正当性と貢献感 ($r = .87, p < .01$) の間に非常に高い正の相関がみられた。また、嬉しさと貢献感の間の相関も高かった ($r = .79, p < .01$)。これらの 3 変数は、相関係数が高いために多重共線性を引き起こしていると考えられる。3 変数はいずれも、自身の行った向社会的行動の結果を肯定的に捉えた際の反応であるため、「結果への肯定的反応」として 1 変数にまとめることとした。嬉しさ、行為の正当性、貢献感を「結果への肯定的反応」として一つにまとめた際の平均値、標準偏差、 α 係数を Table 1 に示す。なお、3 変数一つにまとめるにあたっては、当該変数を構成する 9 項目の得点の平均値を算出した。

(a) 「結果への肯定的反応」と残りの 3 変数、すなわち、(b) 受け流し願望、(c) 好感、(d) 感謝されたことへの感謝との VIF を算出したところ、5.0 以下（1.0—2.9）となったため、感謝されたときに関しては、説明変数としてこれらの 4 変数を仮定することとした。

Table 2
本調査 1（友人からの感謝）における重回帰分析の結果

感謝されたとき	同じ相手 ／同じ内容	同じ相手 ／向社会的行動一般	他者一般 ／同じ内容	他者一般 ／向社会的行動一般
結果への肯定的反応	.45 ***	.55 ***	.37 **	.37 **
受け流し願望	.04	.02	.05	.12
好感	.22 †	.14	.04	.03
感謝されたことへの感謝	-.01	.04	.09	.01
R^2	.39 ***	.46 ***	.21 ***	.17 **
感謝されなかったとき	同じ相手 ／同じ内容	同じ相手 ／向社会的行動一般	他者一般 ／同じ内容	他者一般 ／向社会的行動一般
嫌悪感	-.11	-.08	.16	.01
軽蔑	.15	-.21	-.23	-.21
悲しみ	.04	-.13	.03	.07
後悔	.01	.35 *	-.06	.08
感謝要望	-.13	.04	.28 †	.26 †
R^2	.02	.08	.09	.08

注) 目的変数に関しては、いずれの指標に関しても、スラッシュの前に向社会的行動の相手、スラッシュの後に向社会的行動の内容を記した。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

なお、感謝されなかったときに関しては、VIF は 5.0 以下 (2.10 — 4.20) となったため、説明変数として (a) 嫌悪感、(b) 軽蔑、(c) 悲しみ、(d) 後悔、(e) 感謝要望の 5 変数を仮定することとした。

感謝された／されなかったときそれぞれについて、各種の心理変数を説明変数、向社会的行動の 4 指標それぞれを目的変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った (Table 2)。その結果、4 指標いずれの向社会的行動でも R^2 が有意となり、本研究で仮定したモデルが目的変数の説明に有用であることが示された。各説明変数が目的変数に及ぼす影響に関しては、結果への肯定的反応が 4 指標いずれの向社会的行動に対しても一貫して有意な正の影響が示された³。このことから、友人から感謝されたときに、自身が行った向社会的行動の結果を肯定的に捉えることは、同じ相手や同じ内容の向社会的行動を繰り返すことにとどまらず、他者一般に対する、向社会的行動一般を促す効果があると考えられる。

一方、感謝されなかったときに関しては、後悔が、

同じ相手に対する向社会的行動一般に対して有意な正の影響を示したものの、他の心理変数については目的変数のいずれに対しても有意な影響はなく、 R^2 も有意でなかった。友人から感謝されなかったときの向社会的行動に関しては、本研究で取り上げた心理変数が十分な説明力をもたなかったと言える。

本調査 2

目 的

本調査 1 では、友人からの感謝を検討対象としたが、そこで得られた結果は友人に限定された結果である可能性がある。本調査 2 では、本調査 1 で得られた結果が他の関係にも適用できるのかを確認するため、見知らぬ人からの感謝を検討対象とする。見知らぬ人に対して向社会的行動を行うことは、多くの人にとって日常生活で起こりうる身近な出来事であるが、見知らぬ人は、偶然遭遇する他者であり、その場限りの関係という点で友人とは大きく異なる。本調査 1 と本調査 2 の結果を総合して整理することによって、各種の心理変数が向社会的行動に及ぼす影響が、いずれの関係でもみられるものであるのか、特定の関係に限定されたものであるのかを明らかにすることができると考えられる。

なお、従属変数とする向社会的行動の指標に関しては、見知らぬ人が相手の場合、その相手にもう一度遭遇し、向社会的行動を繰り返す機会を想定することは難しいと考え、(a) 他者一般に対する同じ内容、(b)

³ 補足の分析として、「結果への肯定的反応」としてまとめた 3 変数それぞれが向社会的行動に及ぼす影響についても分析を行った。具体的には、(a) 「結果への肯定的反応」としてまとめた 3 変数 (嬉しさ、行為の正当性、貢献感) のうちいずれか 1 変数と、(b) 受け流し願望、(c) 好感、(d) 感謝されたことへの感謝を説明変数、4 指標それぞれの向社会的行動を目的変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った。その結果、「結果への肯定的反応」を構成する 3 変数はいずれも、4 指標の向社会的行動に対して有意な正の影響をもつことが示された。

Table 3
本調査2（見知らぬ人からの感謝）における各変数の平均値，標準偏差， α 係数

感謝されたとき				感謝されなかったとき			
心理変数	<i>M</i>	<i>SD</i>	α		<i>M</i>	<i>SD</i>	α
受け流し願望	2.90	(1.13)	.87	嫌悪感	2.40	(1.38)	.95
好感	2.89	(1.15)	.79	軽蔑	2.06	(1.27)	.92
感謝されたことへの感謝	2.45	(1.27)	.89	悲しみ	2.33	(1.20)	.88
結果への肯定的反応 ^a	3.72	(0.98)	.93	後悔	1.94	(1.05)	.79
				感謝要望	2.44	(1.29)	.92
向社会的行動							
	<i>M</i>	<i>SD</i>			<i>M</i>	<i>SD</i>	
他者一般／同じ内容	3.80	(1.12)			2.94	(1.24)	
他者一般／向社会的行動一般	3.88	(1.10)			2.99	(1.24)	

^a 嬉しさ，行為の正当性，貢献感を一つにまとめた変数。これらの変数は本調査1で統合したため，本調査2でも統合して得点を算出した。

他者一般に対する向社会的行動一般の2指標のみを取りあげることとした。

方 法

対象者と手続き 回答者は，大学生227名であった。本調査1と異なっていたのは，見知らぬ人に親切をして感謝された／されなかった経験を思い起こしてもらった点のみであり，他の手続きおよび調査時期は本調査1と同じであった。なお，本調査2の回答者は，本調査1の回答者とは別の者であった。

質問項目 心理変数，向社会的行動（他者一般に対する同じ内容，他者一般に対する向社会的行動一般）の測定項目および回答段階は本調査1と同じであった。

結果と考察

回答に不備のあったデータを除いた結果，感謝されたときについて107名（男性44名，女性63名，平均年齢20.18歳），感謝されなかったときについて110名（男性38名，女性72名，平均年齢20.04歳）のデータが分析対象として残った。

各変数の構成 測定した変数の記述統計をTable3に示す。心理変数については，本調査1と同じ種類を仮定した。また，信頼性係数については， $\alpha s > .78$ となり，十分な内的一貫性が示された。また，本調査1と同様の分析方法で，感謝された後と感謝されなかった後とで向社会的行動に違いがあるか検討したところ，いずれの指標に関しても，感謝された後の方が，感謝されなかった後よりも有意に得点が高かった（他者一般に対する同じ内容で $t(215) = 5.40, p < .001, d = 0.73$ ；他者一般に対する向社会的行動一般で $t(215) = 5.59, p < .001, d = 0.76$ ）。

各種の心理変数が向社会的行動に及ぼす影響 各種の心理変数が向社会的行動に及ぼす影響を検討するに

あたって，まず，説明変数とする心理変数間のVIFを算出した。その結果，感謝されたときの4変数（結果への肯定的反応，受け流し願望，好感，感謝されたことへの感謝），感謝されなかったときの5変数（嫌悪感，軽蔑，悲しみ，後悔，感謝要望）いずれに関しても $VIFs < 5.0$ （感謝されたときで1.03—2.70，感謝されなかったときで2.10—4.00）となったため，多重共線性の疑いは強くないと判断した。

重回帰分析（強制投入法）の結果をTable4に示す。感謝されたときに関しては，2指標いずれの向社会的行動でも R^2 が有意となり，本研究で仮定したモデルが目的変数の説明に有用であることが示された。各説明変数が目的変数に及ぼす影響に関しては，結果への肯定的反応が，2指標いずれの向社会的行動に対しても有意な正の影響を示した⁴。このことから，見知らぬ人から感謝されたときに，自身が行った向社会的行動の結果を肯定的に捉えることは，他者一般への向社会的行動一般を促す効果があると考えられる。

感謝されなかったときに関しては，小さい値ではあるものの R^2 が2指標いずれの向社会的行動でも有意となり，本研究で仮定したモデルが目的変数の説明に一定の有用性をもつことが示された。各説明変数が目的変数に及ぼす影響に関しては，感謝要望が2指標いずれの向社会的行動に対しても有意な正の影響を示した。見知らぬ人に対して向社会的行動を行い，それが感謝されなかったとき，自身がした親切に対してきちんとお礼を言ってほしいと思う場合には，別の他者に対して向社会的行動一般をとりやすくなると考えられ

⁴ 補足の分析として，本調査1の分析と同様の分析方法で，「結果への肯定的反応」としてまとめた3変数それぞれが向社会的行動に及ぼす影響について検討した。その結果，「結果への肯定的反応」を構成する3変数はいずれも，2指標双方の向社会的行動に対して有意な正の影響をもつことが示された。

Table 4
本調査 2（見知らぬ人からの感謝）における重回帰分析の結果

感謝されたとき	他者一般／同じ内容	他者一般／向社会的行動一般
結果への肯定的反応	.49 ***	.58 ***
受け流し願望	.11	.13
好感	-.16	-.18
感謝されたことへの感謝	.08	.03
R^2	.26 ***	.21 ***
感謝されなかったとき	他者一般／同じ内容	他者一般／向社会的行動一般
嫌悪感	-.29	.31 †
軽蔑	.20	.19
悲しみ	.22	.27 †
後悔	-.09	-.19
感謝要望	.32 *	.29 *
R^2	.14 **	.13 *

注) 目的変数に関しては、いずれの指標に関しても、スラッシュの前に向社会的行動の相手、スラッシュの後に向社会的行動の内容を記した。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

る。

総合考察

本研究では、感謝された／されなかったときに生じる認知や感情の種類を整理した上で（予備調査）、それらが向社会的行動に及ぼす影響について検討を行った。向社会的行動に対して感謝した／しなかった他者としては、友人（本調査 1）と見知らぬ人（本調査 2）を取り上げた。検討の結果、感謝されたときに関しては、いずれの相手の場合も、「結果への肯定的反応」が向社会的行動を促す影響が示された。そしてその影響は、同じ相手や同じ内容の向社会的行動を繰り返すことにとどまらず、他者一般に対する向社会的行動一般に広く影響を及ぼしていた。感謝されたときに向社会的行動が促される心理過程について検討を行った Grant & Gino (2010) では、感謝されたとき、自身が社会的に価値ある存在として認められているという感覚である「社会的価値」という心理変数が向社会的行動を促すことが示されている。本研究における「結果への肯定的反応」は、他者に貢献できたことを喜ぶ内容が含まれているため、他者とのつながりの中で自身の価値を見出す「社会的価値」と近い概念であると捉えられる。Grant & Gino (2010) は、社会的価値が同じ内容の向社会的行動を繰り返すことを促すことを示したのみであったが、本研究の結果から、このような内容の心理変数は、同じ内容の向社会的行動の繰り返しに限らず、向社会的行動一般を促す効果があることが明らかとなった。

感謝されなかったときに関しては、重回帰分析の結果、友人が相手の場合（本調査 1）では、4 指標い

れの向社会的行動でも R^2 が有意とならず、本研究で仮定したモデルでは向社会的行動の生起を十分に説明することができなかった。一方、見知らぬ人が相手の場合（本調査 2）では、小さい値ではあったものの R^2 が有意となり、感謝要望によって、他者一般に対する同じ内容の向社会的行動および向社会的行動一般が促されることが示された。この結果は、見知らぬ人に向社会的行動を行ったとき、相手から肯定的な反応を求めているにもかかわらず、それがかなわなかった場合に、別の他者に向社会的行動を行うことを通してその欲求を満たそうとする心理メカニズムが存在することを示唆している。本研究では、感謝されなかったときに向社会的行動を抑制する心理変数を明らかにする目的で、感謝されなかったときの心理変数について検討を行ったが、上記の結果から、感謝されなかったときには、向社会的行動を抑制する心理メカニズムではなく、促進する心理メカニズムが生じる場合があることが示唆された。

最後に、本研究の課題について述べる。本研究の最も大きな課題は、感謝されなかったときの向社会的行動の生起について、十分な説明が提供できなかった点である。本調査においては、予備調査で収集したさまざまな心理変数を説明変数として投入したものの、 R^2 が有意でなかったり（本調査 1）、有意であっても非常に小さい値であったり（本調査 2）と、全体的に十分な説明率とは言えない結果となった。また、本研究の目的の一つは、感謝されなかったときに向社会的行動を抑制する心理変数を明らかにすることであったが、本調査においてそのような心理変数はみられなかった。以上のような結果は、本研究で仮定した以外

の変数。たとえば、向社会的行動の送り手と受け手とのこれまでのやりとりや、パーソナリティ等が、直接あるいは調整変数として、向社会的行動の生起に関わっていることを意味しているのかもしれない。今後は、認知・感情以外の変数も含めた包括的なモデルを模索することで、感謝されなかった後に向社会的行動が抑制される心理過程を明らかにすることが求められる。

本研究の二つ目の課題は、一般化可能性に関わるものである。本研究は大学生のみを調査対象としており、性差について詳細な検討を行わなかったが、今後は、本研究で得た結果が、いずれの年齢層でも、いずれの性別の組み合わせでも再現されるのか、調査対象を拡大したり、性別の組み合わせ毎の検討を行ったりする必要がある。本研究は想起法による調査による検討であるため、その結果から因果関係を断定することはできないが、上記のような検討を進めていく上では、調査だけでなく実験的手法も用いることで、感謝された／されなかったことでその後の向社会的行動が影響を受けるまでの心理過程について、因果関係を確認することが求められる。

本研究の三つ目の課題は、感謝された程度に関して検討を行っていない点である。本研究の調査で得た回答のうち、感謝されなかった場合に関しては、回答者が認識した「感謝された」程度はいずれも0である。これに対して、感謝された場合に関しては、回答者が「弱く感謝された」と認識した場合も「強く感謝された」と認識した場合も含まれていたと考えられる。今後は、感謝された場合に関して、その認識の程度も測定することで、「感謝された」という認識がいずれの認知や感情と特に強く結びついているのか、詳細を明らかにしていくことが求められる。

引用文献

- Bartlett, M. Y., & DeSteno, D. (2006). Gratitude and prosocial behavior: Helping when it costs you. *Psychological Science*, 17, 319–325.
- Clark, R. D. (1975). The effects of reinforcement, punishment and dependency on helping behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 1, 596–599.
- Crano, W. D., & Sivacek, J. (1982). Social reinforcement, self-attribution, and the foot-in-the-door phenomenon. *Social Cognition*, 1, 110–125.
- DeSteno, D., Bartlett, M. Y., Baumann, J., Williams, L. A., & Dickens, L. (2010). Gratitude as moral sentiment: Emotion-guided cooperation in economic exchange. *Emotion*, 10, 289–293.
- Goei, R., & Boster, F. J. (2005). The roles of obligation and gratitude in explaining the effect of favors on compliance. *Communication Monographs*, 72, 284–300.
- Goldman, M., Seever, M., & Seever, M. (1982). Social labeling and the foot-in-the-door effect. *Journal of Social Psychology*, 117, 19–23.
- Grant, A., & Gino, F. (2010). A little thanks goes a long way: Explaining why gratitude expressions motivate prosocial behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 98, 946–955.
- McCullough, M., Kilpatrick, S., Emmons, R., & Larson, D. (2001). Is gratitude a moral affect? *Psychological Bulletin*, 127, 249–266.
- Montgomery, D. C., Peck, E. A., & Vining, G. G. (2012). *Introduction to Linear Regression Analysis* (4th ed.). New York: Wiley.
- Moss, M. K., & Page, R. A. (1972). Reinforcement and Helping behavior. *Journal of Applied Social Psychology*, 2, 360–371.
- Tsang, J. (2007). Gratitude for small and large favors: A behavioral test. *Journal of Positive Psychology*, 2, 157–167.